セネガルでの家政教育

横　山　真　智　子
（家政・各務原市立鵜沼第二小学校教諭）

１．　任国の印象

セネガルの首都ダカールは都会。開発途上国と言われる国の多くが首都はかなり発達していると聞いていたが、なるほどその通り、といった感じ。高層ビルもあり、道路は車がいっぱいで交通渋滞も深刻。マルシェ（市場）やその付近の路上は売り子やお客さんでにぎわっている。女性たちはきれいな衣装を身にまとっている。男性は洋服を着ている人が多いような気がする。高級車に乗ったり、きれいに着飾っていたりする人々の横で、空き缶を脇に抱え、物乞いをする少年（タリベ）の姿も見かける。イスラム教の修行の一環だそうだが仏教でいう托鉢とはイメージが異なる。裸足で、ボロ布をまとっているといった格好。中には路上で生活している子どももいる。貧富の差が拡大しつつあるようだ。街を歩いている限りでは、物があふれ、豊かであるといった印象を受ける。

【ダカール市内：高層ビルが立ち並ぶ】

人々は、朗らか。話し好き。知り合いに会うと握手をし、近況を尋ねしばらく話をする。これは田舎へ行けば行くほど長く丁寧になる。そして、親切でシャイなところもある。地方へ行き、道を歩いていると、必ず声をかけてきて、道順などを案内してくれる。家族や知り合いの前では、派手に踊る人たちも他のセネガル人の前ではおとなしく、日本人の気質と似ているな、と感じる。もちろん人にもよるのだが、大雑把な印象としてはこんな感じ。時間にルーズだと聞いていたが、今のところ意外ときちんとしているような気がする。ダカールと村とでは違うと思うが。

【独立広場：旧事務所より撮影】

２．　現地語学訓練

赴任後、一ヶ月あまりティエスというダカールから一時間半あまり離れた町で語学訓練を受けた。派遣前に、駒ヶ根の訓練所で３ヶ月間フランス語を学んだが、ここでは語学のみでなく、フランス語を通してセネガル文化についての理解を深めることも目的としている。

私は、配属先が学校であるということでフランス語を２週間半、現地語であるウォロフ語を一週間というプログラムを受けることになった。

担当の先生が非常に熱心で、教材や授業の展開にも工夫を凝らして学習が進められたので、楽しく学ぶことができた。また、セネガル文化などについてインタビューするという「話すこと」が主な宿題として与えられたことも、話す力を身につけるには役立った。また、授業の一環として、近くに住むティエス州のシェフであるモニトリス（生活改良普及員）に直接インタビューできる機会がセッティングされたり、近所に住む小学生に小学校の話を聞いたりするなど、アクティビティが多く取り入れられていたことも大変有意義であった。文法の学習は駒ヶ根での復習であったが、用いる単語や文章の内容が、セネガル文化に関わることや実際に学校で使う表現が含まれているものであったため、レベルアップにつながったと思う。

ウォロフ語に関しては、学習期間が短かったこともあり、実際に会話ができるほどの上達は望めなかった。それでも簡単なあいさつができること、基本的な文法がわかったことは、今後自己学習を進める上での基盤となるものであったと思う。

この現地語学訓練期間中は、セネガルの家庭を知るということで、セネガル人宅にホームステイさせていただいた。父・母・娘２人・息子１人・母の弟・父の妹とその子ども。友人などもよく家に泊りに来ていた。

【研修センターにて：担当の Ouly 先生と】

３．　教育事情

セネガルの公立学校（フランス語で教育）のほかに、アラビア学校（アラビア語で教科指導）イスラム教のみを学ぶコーラン学校、カトリック系の私立学校がある。ダカールにはアメリカンスクールもある。

通常は、公立学校か、宗教系の学校のどちらかに入る。小学校入学時に試験はないが、一年ごとに進級試験がある。成績次第で小学校一年生から留年もある。いきなりフランス語での授業となるので、一年生を 2 回やり直す子も少なくない。ただ、3 回目はないので、2 回目の試験の成績がよくないときはそこまで、となる。最高でも 14 歳までしか小学校にはいられない。中学校は 5 年間、高校は 4 年間、在籍が可能。（一度の留年までは認められる）日本の 6・3・3 制とは異なり、フランス式に 6・4・3 制である。それぞれ、卒業資格を取得し、さらに入学のための選抜試験に合格しないと次の学校に進めない。

【村の小学校：休日に井戸水を汲みに来る子も】

４．　授業

10 月から新学期が始まったが、最初の 2 週間は、会議があるくらいで生徒も先生もまばら。実質的に第 3 週からのスタートとなった。

要請には「手工芸」分野に対する要望が強かったが、校長と話をしていくとなかで、「さまざまな科目を見た上で、相談して決めましょう。」ということになった。

昨年度の作品を仕上げているクラスもあったが、多くのクラスは、授業計画を生徒と話し

合って決めている。刺繍・クロスステッチ・編物（かぎ針）・織物・ビーズアクセサリー・かばんや帽子などの小物の本や、バカンス中に作ったものを示した。クラスによって反応は異なったが、興味を示したものは、

- ビーズアクセサリー（男子生徒も好む）
- かばんや帽子
- 立体的な刺繍（スタンプワーク）
- かぎ針編みのポーチ（重なりがある）

である。刺繍や、かぎ針編みは、これまで経験したことのある生徒が多いが、ちょっと立体的になっているだけでもセネガルでは見たことがないので興味をひくようだ。布と小枝で作った鍋敷きのような「素朴」なものは、あまり好まれなかった。材料費がかからなくていいとは思うのだが･･･。そもそも床（土やコンクリートまたはタイル）に直接鍋を置く家庭が多いので需要もあまりない。

実際に生徒に会う前、実態把握もできてないうちに、自分のイメージのみで試作したものであるので、全部受け入れられるというわけにいかなかったのも当然の結果である。

そこで、生徒の関心が高かったものを改めて作ってみることにした。本に出ている多くの作品例の中から、実際に生徒が興味を示した作品を試作する方が効率的である。

10 月は、本格的な授業に入るクラスは少なかった。本格的に始まるのは 11 月であるようだ。

昨年度の続きで刺繍をしていたクラスで、細かなステッチの方法がよくわからない生徒がいた。言葉の問題もあって、まず教員に実際に見せ、その後、教員から生徒に説明してもらっている。この方が、直接生徒に指導するよりもいいような気がする。とりあえず語学が上達するまでは、この方法を続けると思う。

10 月の第 2 週目に、昨年度のモニター2 年生が、集中講義を受けていた。彼らは、バカンス中に 2 ヶ月ほど村（今年はトゥーバの 5 ヶ村）に入って、村全体の年齢構成から収入・教育・生産しているものなどの実態調査、及び分析をしてきた（バカンス明けにレポートを提出）。

10 月末から、数人のグループに分かれて実際に村で指導をするため、この一週間で、一人ひとりの生徒が、プレゼンテーションを行う。他の生徒は、村人役である。村での指導を前提としているため、ウォロフ語で話す。それでも、ポスターや実物があるので、言葉は理解できなくても、何について説明しているのかは想像がついた。生徒はそれぞれフランス語でレジュメを書き、指導を受けている。何人かのレジュメを見せてもらった。

一人ずつテーマに沿って、全員の前に立って話を進めていくが、聞いているほうも積極的に意見を出し、質問する。沈黙になることはない。また、プレゼンの途中や発表後に、教員が指導する。この時は、フランス語。ウォロフ語担当教員の他に、毎日交代で、二人の教員がアドバイザーとして加わっていた。

「一度に 2 つのことを説明するのではなく、1 つずつ、きちんと理解できているか確認しながら進めたほうがいい。」「パンフレットを回覧するのもいいが、時間がかかりそうなもの

は、数部用意するか、コピーがあるとよい。」「パンフレットを回覧中に話を始めてしまっては、まだ見ていない人には理解できない。」「質問して、答えを聞いて、という一問一答式でなく、さらに切り返しの質問をして理解を深めるように。」「ポスターを指すとき、体で一部隠れるので、指示棒を使うなど聞いている人が見やすいように。」「きちんと相手のほうを見て手振りをつけるように。」など、具体的な指示やコミュニケーション技術に関わることなど的確な指導がなされているように感じた。教育実習を思い出す。

セレール出身の生徒はウォロフ語をうまく話せないので苦労していた。途中で何度も中断してしまったり、やり直しさせられたり、結局フランス語にしなさい、と言われたり･･･。ハンディがあるのだなぁ、と思った。セレール出身の 4 人の生徒は、村には行かずに本校での実習となる（農業・飼育・衛生学の授業などで先生として）。

バカンス中に、もしかしたら役に立つかなと思い作成した栄養指導資料も、ほぼ同じような教具（カラーできちんとしたパネルになったもの）が学校にあった。避妊についてのプレゼンにおいては、コンドームの実物や避妊薬のパンフレットなどを生徒が準備してきた。また、鶏の飼育の仕方についても、金網やえさ箱など実物も多くあり、さらにその場で実際に地面に円を描き、飼育小屋をセットしてみせるなど興味深かった。